讃岐の石

伊達伍

一　金掘場の遺蹟

山容を占ったり、山を歩き廻って、どこかに、金や銀はないか、その鉱石は見つからないものかと、宝探しの夢を追った人もあったに違いない。そうした山師の仕業でもあろう、全国的にも珍らしい鉱物資源の不毛地帯である讃岐…その山々にも、あきらかに自然の浸蝕や風化の結果とは違った、どこかに人為の加わった岩窟―試掘の跡が、ところどころに残っている。

それらの多くは誰にも知られず、忘れ去られているが、中には「金堀場」など と呼ばれて、明らかに鉱石を試掘した証拠の残っているものもある。「金掘場」―この呼称は鉱山の通称語として広く使用された江戸時代の一般用語なのだから

である。

さて、讃岐におけるその「金堀場」の地名をこれから探してみよう。

宇多津の北浦―番の州工業地帯を控える聖通寺山の北端にある部落だ。その北浦に面する聖通寺山下に戦時中の防空濠を思わせる深い洞窟がある。

旧海岸線に近い所なので、或は海波の浸蝕によるものかと疑われるが、実はこの洞窟は、明らかにさく岩のあとのある人工の坑道であることが、誰の目にもわかる。抗口から凡そ、十四、五メートル程掘られている。物凄く硬いペグマタイト（鬼花崗岩）の岩盤を打ち抜いて奥につづいている。

坑内は大人が二人立並んで歩行出来るだけの広さがある。土地の人にたずねると、「さアー、よくは知らないが昔からこの穴を金堀場と云うのです…」とだけ説明して呉れる。

私は、「英公実録」（高松藩主松平家初代頼重公の日記風の年譜）の承応三年甲午（一六五四年）の末尾に、「この年銀を山に掘る…日月不詳なれども銀山は

石田、及び宇多津にあり…」と記述されているのに関心を持っていたのでこの聖通寺山の金掘場は、銀鉱採掘のため、高松薄の手で掘られた遺蹟であることを確認していたので、特に物知りの古老を探ねて話をきいてみたが、そんなことはご存知ない。もう古い伝承は忘却していた。

「そうですなア、この穴を金掘場ということは、聞いているが、私の若い頃、黒い羽織を着込んだ坂出の人がこの金掘場にやって来て、人夫に指図をしていたのはよく覚えています。なんでも、焼くと青い火の出る蛍石（ホタル石）というものを、ここから堀出しては船に積んで廻漕していた。もう五十数年も前になりますかなア、その時戦時中でしたか、宇多津の某氏が、この山には金があるんだ、銀があるんだと、言って山中を探索していたこともありました…」と、子供の頃に見聞したことを物語ってくれるだけであった。

この聖通寺山には、今の近鉄観光センターのある山頂の北西部にも岩窟があって、その当時の抗道跡らしいものが残っている。

ともかく、ここは江戸時代の初期、一時は銀山として騒がれたこともあって、藩主の記録にも残っている。その遺蹟から見て、鉱石は出たものの、その期待は思わしくなく間もなく廃坑となった形跡が十分うかがわれるのである。

さて、英公実録に宇多津とともに、銀が出ると記録された石田（今の寒川町）これはもとの大川郡の石田村である。その石田に金掘場の遺蹟が残っていた。

石田に金山と云う粗面岩質安山岩の山がある。富田と神前の村境に孤立した百メートル程度の平地の丘だが、その南端に岩穴がある。これが金掘場で、その穴は一丈程下にはいり込んで、そこから坑道が二つに分かれている。

もう一つは同じ石田の天王山にある。この山はその頂上部に古墳があって知られているし、古くは水晶も出る山として知られていた。

この天王山の金掘場の跡は、石田村史によると明治の末、富田村の某氏が、それを堀崩してしまって今では、穴跡も埋まってしまったと云う。

ともかく、ここも「金掘場」と云う伝承だけ残していて、承応三年、字多津の

聖通寺山と共に銀山として、当時の藩が銀鉱を試掘したことのあるところなのだ。しかしその史実はいつの間にやら忘却されているのである。

これはまた、明治以後の新しい別の話である栗熊（綾歌町）と羽床（綾上町）の境に高見峯という山に二ケ所岩穴のあとがある。ここも山師の試掘のあとだ。ここには銅が出るというので、しきりに山師が入り込んで鉱石を掘ったと云うが失敗だった。ところで村の噂では、山師が他の鉱山の鉱石をこの岩穴に入れて置いて、実はその権利を売って大もうけをしたと云う。いわばインチキ山師の話も伝わっている。いずれにしても、ここも金掘場の遺蹟である。

銅といえば、「黄銅鉱が長炭村の金剛院に産す然し勿論極少量で標本程度のものが出る」と香川県地質概説（師範学校編纂）に記載がある。金剛院は地名であるが、その名の通り、昔は釈迦如来を安置した。巨刹のあった土地で、附近には今も坊のつく地名が随分多い。また、今の高松市下笠居に砂金が出るというので各所に試掘した跡が残っていると、同書に記載しているが、これも少量発見した

程度であったらしく、やめてしまったという。これらはみな山師達のはかない試掘の夢のあとというものであろう。